



# 会報誌 7

苫小牧地区バドミントン協会

1月に行われた選抜の南北海道予選会が無事に苫小牧で行われました審判に協力して下さった方に感謝申し上げます。しかし、コロナショックのため全国選抜大会は中止、今年度の地区大会や全道大会、全国大会までも中止または延期になりました。

それに伴い、体育館施設や学校が休みになり、私たちバドミントンを愛する者はコート練習ができない状態です。東日本大震災や胆振地方中東部地震などで、一部の地域が使えない経験があってもこれほど広範囲で、ましてや大勢の人と接してはいけない状態になる経験はありませんでした。特に、高校3年生は最後のインターハイの成績でその後バドミントンができる環境が大いに違ってきます。

どうして、私の時にと思っている学生さんもいるでしょう。誰しも順風満帆な人生など保証されていないのです。世界ランク1で圧倒的強さだった桃田選手も高校生の時、東日本大震災で福島の富岡高が練習できなくなり、今年、マレーシア大会で優勝後、交通事故遭いました。大切なのは心の強さとコート練習ができなくとも自分なりに工夫をして、いざスタートというときにすぐ準備ができる状態にいること、コーチがみているから練習するのではなく自ら練習を工夫できることが大切なのではないのでしょうか。

主審をやっている、線審が出した合図の判定で揉めた経験のある方は結構いると思います。最近では国際大会では「チャレンジ」制度あり、揉めることがなくなりました。2006年からは線審の判定を主審は判定が明らかに間違えなら覆すことができるようになり、それ以前は、線審の判定は絶対でありました。

市民大会レベルなら線審を呼び出して確認しますが、TVマッチ、国際大会やレベルの高い大会では線審を呼び出す事はしません。レベルの高い大会なら皆さん公認審判員の有資格で、グレーゾーンの判定を主審が覆すことは線審のプライドを傷つけることとなります。私自身はこのような判定では線審の判定をなるべく採用します。プレーヤーやコーチを含め主審に詰め寄ってきますが、線審の判定を守ってあげることも必要です。時には、しつこい抗議にはプレーヤーにカードを出す勇気も必要、個人戦なら「コーチに席に戻ってくださいこれ以上はレフェリーを呼びますよ。」と笑顔で対応、主審はコートの中では一番冷静で大人の対応をしなければなりません。

主審は、即座に自分の判定の意志が変わらないことをプレーヤー告げ、執拗な抗議をやめさせ、プレー継続をさせることが大事で、よく毅然とした態度でと言いますが、時にはプレーヤーにジョークを飛ばして笑顔で諦めさせることも主審のテクニックのひとつです。

